

無制限なクリティカルシンキングの不合理性

伊勢田哲治（京都大学）

クリティカルシンキングは近年日本でも教育科目として広まりつつあり、クリティカルシンキングの教育手法の研究、ひいてはクリティカルシンキングそのものについての研究もまた深まりつつある。そうした教育や研究は、クリティカルシンキングが合理的な思考そのものを体現しているという前提に基づき、当然奨励すべきものとして教育・研究されている。

クリティカルシンキング教育の内容は、教育する者の背景に応じてある程度の多様性を持つが、論理学の初歩、議論の構造分析、さまざまな認知的バイアスについての知識、科学方法論（とりわけ統計的検定法）の初歩などを含むことが多い。

しかし、実際にクリティカルシンキングとして教育されている内容を見るならば、それが決して無制限に推奨すべきものではないことも明らかであるように思われる。

すぐに思いつくのはコストパフォーマンスの問題である。クリティカルシンキングの知識を利用することはもちろん慎重な検討が必要な場面においては重要である。しかし、検討作業自体が時間をはじめとしたリソースを消費することを考えれば、リソースのマネジメントの観点からみてクリティカルシンキングを追求することがかえって不合理になることがありうる。

しかし、本発表で中心的に考えたいのは、文脈を無視した疑いの非生産性の問題である。これは、クーンがパラダイムの一つの重要な役割として想定したものと関連する。パラダイムが共有されることで、科学者は基礎理論、問題の解き方のモデル、世界観、何が面白い問題かについての了解など、研究の前提を広範囲に共有することになる。パラダイムを共有した科学者たちは根源的な問いについての論争から解放され、パズル解決に専念できる。そうした通常科学の営みがうまくいっている間は、パラダイムそのものを疑うような思考、パラダイムについての「クリティカルシンキング」を科学者たちに求めるのは、かえって彼らの生産性を削ぐことになる。

では、こういう事例をふまえて「無制限」でないクリティカルシンキングを行うというのは具体的にどうしたらいいのだろうか。個別の具体的なアドバイスは当然さまざまな形で可能だが、ここでは無制限でないクリティカルシンキングについて考えるための枠組みとして「文脈主義」と「メタクリティカルシンキング」という二つの概念を導入する。簡単に言えば、クリティカルシンキングを行う文脈そのものについて批判的に考えるレベルを導入することで、日常的な生活や研究活動の場でのクリティカルシンキングをより効果的に活用できるようになるはずである。